

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月13日現在

機関番号：34313

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21360302

研究課題名（和文） 東アジア中世における首都の空間構造

研究課題名（英文） Spatial structure of the capital in East Asia Middle Ages

研究代表者

高橋 康夫（TAKAHASHI YASUO）

花園大学・文学部・教授

研究者番号：60026284

研究成果の概要（和文）：都市壁をもたない琉球の首里と日本の京都においては自然と深く関わる固有の都市空間が形成されたこと、非囲郭・拠点散在・風景都市(Landscape city)としての様相・特質を指摘することができた。囲郭都市(Walled city)としてのヨーロッパ中世都市・東アジア古代都城の〈普遍性／一般性／画一性〉の相対化が必要とされる今、京都や首里・那覇の成果を通してそれらに対置しうる都市性、その〈固有性／特殊性／多様性〉を提示することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：I pointed out, that urban space unique deeply involved with nature has been formed in Kyoto, Japan and Shuri of Ryukyu that does not have a city wall, and the nature and aspects of Landscape City. It is necessary to be a relative of ancient East Asian cities and medieval European cities, and now it becomes possible to present the nature of the city of which may be opposed to them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2010年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2011年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2012年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、建築史・意匠

キーワード：都市史

1. 研究開始当初の背景

都市史においても、各国史の枠組を越え、少なくとも東アジアを視점에据えて研究を進めなければならない研究段階に到達している。

日本の都市史研究の先進性と中世京都および琉球・首里の研究を基盤として、文明と文化の関係の視点から首都の研究をさらに推進することは、東アジア都市史研究に明確な道筋を提示することになり、研究の国際的な発展にとっても大いに有益と考える。

2. 研究の目的

本研究では、対外関係史、比較都市史的な視点と方法を援用しつつ、建築史学の立場から、中世東アジアの首都の空間構造に焦点を合わせ、以下の4つの課題を明らかにしたい。

(1) 東アジア中世における首都の変容と空間構造

朝鮮のソウルや琉球の首里、日本の京都は、明の首都（明初の南京、その後の北京）を中核とする中国文明の周縁に成立、発展した。

これらの都市空間はどのようなものであり、どのような歴史的特質をもっていたのか。日本の辻子・巷所、中国の侵街など、都市住民による生活空間形成、「まちづくり」ともいえるべき都市現象を史料に即して解明しつつ、東アジア中世の軍事・政治・経済・外交・宗教・文化のありようが如実に反映しているものとして、それぞれの変遷過程と空間構造を解明する。

(2) 東アジア中世の首都

——共通性と固有性

中国との地政学的関係の相異から生じる首都の多様性について、比較都市史的な考察を行う。古代中国都城との共通性、そして風水を含む都市思想・環境理念、道・路にかかわる社会通念、生活空間形成のありかたなど、多様な視点から検討を加え、ソウル・首里・京都の特質に迫る。なお日本中世東国の首都ともいえるべき成立期の鎌倉も、検討の対象に加える。

(3) 西洋中世における首都の変容と

空間構造

日本の辻子・巷所と同様の都市現象は、同じく文明の周縁に成立した西洋中世の首都（パリ、ロンドン、エジンバラなど）においても存在している。都市住民による生活空間形成という独自の視点から、これらの都市の変容過程を検討し、空間構造の特質を把握する。

(4) 世界のなかの東アジア中世の首都

——普遍性と多様性

西洋中世の首都との比較都市史的検討を通して、東アジア中世の首都の普遍性と多様性を明らかにし、中世世界のなかに東アジア中世の首都を位置づける。

3. 研究の方法

東アジア中世の首都、とくに日本の京都と琉球の首里を中心として、建築史学・都市史学の立場から、比較都市史的な視点と方法を援用しつつ、以下に示した4つの課題、サブテーマを中心に研究を実施する。古地図・古絵図資料、文献史料、さらに筆者自身がその史料価値を見いだした漢詩を有益な史料として活用するとともに、GIS(地理情報システム)を活用して、多様で膨大なデータの整理・活用を図り、京都や首里の変遷過程や空間構造を可視化する。

(1) 東アジア中世における首都の変容と

空間構造

①帝国の首都：北宋の開封、南宋の臨安、明代初期の南京、その後の首都北京について、帝国・皇帝による都市理念・計画、また地域

的な特質があらわれる都市住民による都市改造(侵街など)について、史料収集を行い、実態を把握する。

②ソウル 王権による大造営：『朝鮮王朝実録』に加えて使朝鮮使録などを活用し、大造営と都城の空間の変容、辻子・巷所・侵街などの現象を解明する。

③首里 王権と神社の創建：首都の成立に不可欠な都市整備・都市開発を探る一環として、古琉球期における神社の創建と分布に着目し、首都の都市理念・計画、王権による地域空間の形成と空間構造を解明する。

④那覇 港市の開発：首里と首都機能を分担した貿易都市那覇について文献史料による変遷の仮説とボーリングデータによる解析結果をGIS上にて組み合わせ、近代に大きく改変された那覇の景観を復元し、「浮島」であった那覇の都市化の過程を明示する。

⑤京都 外交施設の配置：首都としてとくに重要な意味をもつ政治・外交・宗教・交易の施設の立地、実態を明らかにする。とくに明から冊封を受けた足利義満の時代、冊封や外交のために建設された施設の立地、その建築的特色などを明らかにする。

(2) 東アジア中世の首都

——共通性と固有性

空間構造の基盤をなす要素・要因について以下の視点から比較検討を行う。

①都市を圍繞する壁：都市壁は、中国の都城やヨーロッパの都市を構成する基本的な要素である。ソウルと鎌倉の都市壁のありかたを比較検討するとともに、都市壁をもたない首里と京都との相異について考察する。

②都市思想・環境理念：中世におけるソウルと首里の都市形成には、風水が大きな影響を与えている。史料に即して双方を比較し、その都市思想・環境理念を検証する。

③道・路にかかわる社会通念：日本の道の特質であり、また都市の形成に深くかかわる「無縁」・「公界」は日本固有のものなのか。東アジアの首都における道・路にかかわる社会通念を、史料に即して具体的に検討する。

④生活空間形成：都市住民による「まちづくり」の手法を比較検討し、あわせてそれらを表現する言葉(日本の辻子・巷所、中国の侵街など)を収集する。

(3) 西洋中世における首都の変容と

空間構造

史料収集や現地調査により、また古絵図・古地図を活用して、西洋中世の首都の変容過程と空間構造の特質を検討する。

①〈市場・町〉：ロンドンの都市的発展の核、シティについて、古絵図・古地図を活用して中世における変遷、重要な施設の配置、街路の発達、街路名の成立を検討する。

②〈辻子・巷所〉：日本の辻子・巷所や中国の侵街などと同様の都市現象は西洋中世の首都（ローマ、パリ、ロンドン、エジンバラなど）においても広くみることができる。その発生と展開、道・路にかかわる社会通念などについて情報を収集する。

③帝国の首都：西洋中世の首都と古代ローマ、さらにローマン・タウンとの共通性と固有性を把握する作業を行う。

(4) 世界のなかの東アジア中世の首都 ——普遍性と多様性

以下の事例のように、東アジア・西洋中世の首都の空間構造を多面的に比較・考察することによって、多様な共通点と相違点を見いだす作業を行い、東アジア中世の首都、とくにソウルと首里、京都の普遍性と多様性を解明するための作業仮説を構築する。

①商業中心地区の様態：京都・「町（まち）」とロンドンのシティの比較を基軸に、東アジアと西洋の中世における商業中心地区を比較し、中世都市の核というべき地域の特性と周囲との関係を検討する。また町家 shop house の成立とそれによる空間構造の変化についても、検討を行う。

②〈社会=空間構造〉：首里とエジンバラは、王城と都市軸の関係が共通するにもかかわらず、異なる生活空間が形成され、それぞれ固有の〈社会=空間構造〉を創っている。こうした事例は少なくないと考えられる。事例の発掘に努めるとともに、その社会史的・都市史背景を考察する。

③〈文化=空間構造〉：文化と空間の相互作用に着目し、ソウルとロンドン・パリ、また京都とロンドン・パリを対比して、首都の理念と計画、都市と自然との関係、都市文化（貴族文化、大衆文化）の成立、それらに起因する空間構造とその変化について、共通点・相違点を検討する。

④帝国の首都：古代都城とローマ、また宋・元・明の首都と中世ローマを比較し、帝国の首都の特質、中世都市化の様態、中国の首都の普遍性と固有性を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 東アジア中世における首都の変容と空間構造

① 首里と首都機能を分担した貿易と外交の都市、那覇について、文献史料による地域変遷の仮説とボーリングデータによる解析結果をGIS上にて組み合わせ、近代に大きく改変された那覇の景観を復元することができた。これにより「浮島」であった古琉球那覇から近世那覇への都市化の過程を明らかにした。あわせて那覇の都市形成に深くかわる渡来中国人の信仰対象であった天妃宮について、古琉球期には上天妃宮と下天妃

宮のほかに、波上の地にもう一つの天妃宮が存在したことを明らかにし、これまでの定説を一新した。また天妃宮の機能の推移が久米村（華人街）の変遷、地域形成と深い関係にあることを示した。

② 南北朝を統一した室町幕府・足利義満と戦国の動乱を統一した近世権力・織豊政権それぞれの大規模開発により形成された首都京都の空間構造を比較、検討し、前者の特質を把握した。また首里と首都機能を分担した貿易と外交の都市、那覇について、「浮島」であった古琉球那覇の地域的状况を復元し、さらに近世那覇の都市景観について検討すること、そして古琉球の波上権現護国寺の創建・再興について同時代史料によって新見解を提示し、波上権現と護国寺が琉球王国と深い関係を築くに至った理由の一端を明らかにすることを通じて、古琉球那覇の都市的な特質、また首里との関係を把握した。

③ 首都平安京から中世京都、そしてその近世から近代への変容過程のなかで、平安京・京都の周縁地域ないし後背地（ hinterland ）を具体的に「景勝 hinterland」として位置づけるとともに、「中心市街地」の特質、さらに中心市街地「京中」・「洛中」と hinterland 「京中」・「洛外」の関係を検討した。また首里と首都機能を分担した貿易と外交の都市、那覇について、古琉球期における港町那覇の造営の実態を検討することを通じて、首都首里との関係を把握することに努め、那覇港経営の政治・経済的・国際的な意味について新たな理解を提示できるにいたった。

④ 明と朝鮮に対比して日本と琉球の首都には城壁の有無などのほか大きな特徴がある。日本中世の都市形成について検討するなかで、京都そして首里の空間構造の特質を把握し、京都については中世から近世への歴史過程を位置づけ、首里については固有の特性を示した。

⑤ 都市壁をもたない琉球の首里と日本の京都においては自然と深く関わる固有の都市空間が形成されたこと、非囲郭・拠点散在・風景都市 (Landscape city) としての様相・特質を指摘することができた。囲郭都市 (Walled city) としてのヨーロッパ中世都市・東アジア古代都城の〈普遍性／一般性／画一性〉の相対化が必要とされる今、京都や首里・那覇の議論を通してそれらに対置しうる都市性、その〈固有性／特殊性／多様性〉を提示することも視界に入ってきた。

(2) 東アジア中世の首都

——共通性と固有性

① 首都のみならず中世都市の空間構造を分析する視点について作業仮説を構築することができた。

② これにより空間構造の基盤をなす要素・要因についてとくに都市思想・環境理念、自然との関係に配慮し、明快な比較検討を行うことができた。

③ さらに、〈中心〉と〈周縁〉との関係に配慮し、比較検討を行った。

④ 京都の固有性を抽出するために、ともに統一を志向した軍事権門——足利義満と豊臣秀吉、中国・明から冊封された二人の「日本国王」——の「王都」について比較検討を行い、近世城下町化とされる秀吉の京都改造成業と対比して、義満の中世的特質をとらえるとともに秀吉の近世都市化も見直すことができた。

(3) 西洋中世における首都の変容と

空間構造

① 日本の辻子・巷所や中国の侵街などと同様の都市現象について実地調査を行い、ウィーンとザルツブルクにも辻子的現象が存在することを確認した。またリオンにはトラブールと呼ばれる通路が建物群のなかを通り抜けていること、日本の辻子などによく似た都市的現象を認めた。そしてパリのパサージュのような事例とは異なる、日本の辻子に類似した事例があること、すなわちヨーロッパには少なくとも2つの類型があることを把握した。

② 西洋とイスラムの文化が混在するマドリッドやセルビア、バルセロナなどにも日本の〈境内〉と〈町〉などと同様の空間現象が存在することを確認した。

③ プラハ城とその城下、新市街について日本の〈境内〉と〈町〉などと同様の空間現象が存在することを確認し、またボヘミアの「首都」であったヴィシェフラトとプラハとの関係から、古琉球期の旧都・浦添を理解する示唆を得た。ほとんど言及されることのない首里への首都移転後の浦添について今後検討する必要性を認識した。

④ ネーデルラントの行政的中心で城塞と市場を起源とするブリュッセルと、早くから首都としてついで商業都市として発展したリオンについて実地調査を行い、日本の〈境内〉と〈町〉などと同様の空間現象が存在することを確認した。

⑤ ブダペストの都市構造は、エジンバラ、そして首里と那覇の関係とも類似し、首都の空間構造を把握する上で示唆的であるという理解を得た。

(4) 世界のなかの東アジア中世の首都

——普遍性と多様性

① 首都を補完する東アジアの交易港市に不可欠な宗教的要素として、媽祖（天妃・天后）信仰の廟、また観音信仰や文殊信仰の堂がある。ヨーロッパにもそれらとよく似た航

海守護の信仰があり、例えばバルセロナの都市的發展過程において「海の聖母マリア」を祀る「海の教会」サンタ・マリア・デル・マル教会が重要な位置を占めることを見いだした。

② ヨーロッパ各地の港町における「海の聖母マリア」を祀る「海の教会」や中国の観音信仰の普陀山と寧波などの事例を増やすとともに、古琉球期の那覇における天妃宮と都市形成の関係を検討した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

① 高橋康夫「古琉球期における「浮島」那覇の造営と地域形成」、『年報 都市史研究』、査読あり、20号、2013、95-118頁

② 高橋康夫「補陀落渡海僧日秀上人と琉球——史書が創った日秀伝説——」、『沖繩文化研究』、査読あり、37号、2011、1-40頁

③ 高橋康夫「古琉球の波上権現護国寺について」、『沖繩文化』、査読あり、44巻1号、2010、1-21頁

④ 高橋康夫「古琉球期那覇の三つの天妃宮」、『沖繩文化研究』、査読あり36号、2010、19-99頁

〔学会発表〕（計2件）

① 高橋康夫「都市・建築史学と文化的景観」、文化的景観研究集会、2011年12月17日、奈良文化財研究所

② 高橋康夫「京町家とまちづくり——祇園祭山鉾町の〈文化的景観〉をめぐって——」、日本民俗建築学会、2011年10月8日、ひと・まち交流館京都

〔図書〕（計2件）

① 高橋康夫、「京都のなかの岡崎」、京都市、『京都岡崎の文化的景観』（共著）、2013、43-53頁

② 高橋康夫、「都市・建築史学と文化的景観」、奈良文化財研究所、『文化的景観研究集会報告書』（共著）、2012、65-70頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 康夫 (TAKAHASHI YASUO)
花園大学・文学部・教授
研究者番号：60026284

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし